

本の紹介
オリンピックの本

今年にはオリンピック開催年。第二十八回オリンピック競技大会が、ギリシアのアテネで八月に行われます。古代オリンピック発祥の地であり、第一回近代オリンピックの開催地でもあるギリシアで行われるため、何かと話題になることも多いようです。そこで今回はオリンピックに関する資料をご紹介します。

【オリンピックについて知りたい】

・『オリンピック事典』 日本オリンピック・アカデミー編 プレシグムナスチカ 一九八一
本編と資料編から構成され、本編では、古代・近代オリンピックに関連する諸項目（用語・競技種目・関係人物等）を五十音順に掲載しています。資料編には、規則・規定・組織に関するもの、年表、大会記録、文献目録などが収められています（ただしモスクワ大会まで）。この図書は参考資料ですので、図書館内でご覧ください。

・『近代オリンピックと日本 写真と記録で見える 栄光の100年全公式記録』 アマチュアスポーツ研究会企画・編集 日本地方新聞協会 一九九七
夏季は第二十六回アトランタ大会、冬季は第十七回リレハンメル大会までの記録がまとめられています。各大会における全種目の一位から三位までの記録と、日本人選手の記録が一覧できます。大会ごとの記録を知りたいときに便利な一冊です。

・『スポーツの本全情報 45〜91』 日外アソシエーツ編・刊 一九九二
・『同 92〜97』 日外アソシエーツ編・刊 一九九八

・『同 1998〜2002』 日外アソシエーツ編・刊 二〇〇三

スポーツ・体育関連の本（国内で刊行されたもの）を網羅的に集めた目録です。オリンピックに関する本については、オリンピック全般・歴史・個々の大会といった項目ごとにまとめられています。全てではありませんが、目次等の内容が紹介されているものもあり、詳細を知ることができます。

・『ビジュアル博物館 第七十九巻 オリンピック』 クリス・オクスレード他著 同朋舎 一九九九
オリンピックの起源から、大会の歴史、競技種目、競技用具、政治的背景など、オリンピック全般に関する事項を紹介しています。

カラー写真を豊富に用いて分かりやすい構成になっているため、小中学生の調べ学習にも適しています。

【オリンピックと日本】

・『幻の東京オリンピック』 橋本一夫著 日本放送出版協会 一九九四

一九六四年の第十八回東京大会以前に、東京でオリンピックを開催する計画がありました。しかし、誘致に成功しながらも、その大会が開催されることはありませんでした。一九三〇年代、戦争と政治に翻弄され、ついには大会を返上しなければならなくなった過程が綴られています。オリンピックを通して、当時の日本の情勢と国家間の関係を知ることができる一冊です。

・『日の丸とオリンピック』 谷口源太郎著 文藝春秋 一九九七

「オリンピック精神の目標は、スポーツを、あらゆる場で、人間の、調和のとれた発育に役立てることにある。またその目的は、人間の尊厳を保つことを大切に考える平和な社会の確立を推進することにある。」（オリンピック憲章より）日本におけるオリンピックは、本来の目的通りスポーツの振興や人間性の向上に貢献しているのか。この観点から、アマチュアリズム、勝利至上主義、商業主義、誘

致問題といった様々な問題を取り上げ、オリンピックのみならず、スポーツ全般の今後のあるべき姿について論じています。

・『陸上競技マガジン 2004・3月号』

ベースボールマガジン社

「アテネ五輪トライアル」と題して活躍が期待される選手を紹介しています。

・『アサヒグラフ』 朝日新聞社(二〇〇〇年に休刊)

大会ごとに特集が組まれてきました。過去の大会について知ることができます。

・『季刊大林 No.36 オリンピック』

大林組 一九九二

株式会社大林組の広報誌です。古代オリンピックについての特集号です。

【福島県人とオリンピック】

本県出身のオリンピック出場者を調べるためには、『福島県民百科』(福島民友新聞社発行)と『福島大百科事典』(福島民報社発行)が便利です。ただし、一九七六(昭和五十一)年のモントリオール大会まで。その後を調べるためには、福島民友新聞社の『福島県年鑑』を、繰っていくことになります。

今回、福島県のスポーツの歴史の中で、後世に影響を与えた二人について紹介します。

三浦 弥平

一九二〇(大正九)年、第七回アントワーブ(ベルギー)大会に、三浦弥平(梁川町出身)が陸上競技・マラソンで出場したのが本県初です。彼は一八九一(明治二十四)年、旧白根村の地主の家に生まれました。生来虚弱でありましたが、片道約二十八キロの白石中学への通学が、マラソンへの志向と、選手としての基礎を形成したといわれています。生涯、スポーツ振興に寄与しました。佐藤昭男著『走る』にその生涯が詳しく書かれています。

また、『梁川町史』第十巻によると、梁川町はその功績をたたえ、一九八〇(昭和五十五年)より、毎年十月に「三浦弥平ロードレース大会」を開催しています。

円谷 幸吉

一九四〇(昭和十五年)年、須賀川市生まれ。須賀川高校時代よりマラソンをはじめ、卒業後自衛官となります。一九六二(昭和三十一年)には、二万メートル競走で世界新を樹立するなど記録をぬりかえてきました。

翌一九六四(昭和三十九)年、第一八回東京大会マラソン競技に出場し、銅メダルを獲得。これは日本陸上競技においても、戦後初のメダル受賞でありました。この時、二位のヒートリー(英国)と、ゴール寸前、マラソ

ン史上に残る競り合いをします。ちなみに、優勝者は「はだしの英雄アベベ(エチオピア)」でした。

この円谷選手が、一九六八(昭和四十二年)、メキシコ大会を目前にした一月に、自殺します。何故なのか。マラソン選手の孤独を知るよしもありません。遺書の「父上様、母上様、三日とろく美味しうございました。：：：幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまったて走れません。：：：」が、胸を打ちます。

青山一郎著『栄光と孤独の彼方へ円谷幸吉物語』は、母親が前書きを、コーチが「思い出」を載せ、写真も多く読者を引き付けます。橋本克彦著『オリンピックに奪われた命』は最後に多数の参考文献があります。長岡民男著『もう走れませんか』は、伝記としては一番早く、一九七七(昭和五十二年)年の発行です。

